

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 10 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2013

課題番号：21520019

研究課題名(和文) 超越論的哲学とパースペクティブ主義についての批判的研究ー近現代哲学の帰趨ー

研究課題名(英文) A critical study on transcendental philosophy and perspectivism. Toward the future of modern philosophy

研究代表者

圓谷 裕二 (Tsuburaya, Yuji)

九州大学・人文科学研究科(研究院)・教授

研究者番号：60227460

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円、(間接経費) 750,000円

研究成果の概要(和文)：近現代哲学においては二つの潮流がある。一方は、超越論的哲学としての究極的基礎づけ主義であり、他方は、経験主義における相対主義あるいは懐疑主義である。

本研究の目的は、近代哲学のこれら二つの立場を同時に克服することである。そのためにメルロ＝ポンティの哲学に着目した。彼の哲学の特徴は、主知主義と経験主義を彼の独自のパースペクティブ主義の立場から乗り越えようとすることである。

本研究は、この目的達成のために、彼の言語論と歴史哲学に定位するものである。

研究成果の概要(英文)：The modern philosophy has two directions. One is ultimate foundationism as transcendental philosophy, and the other is relativism or skepticism in the empiricism.

A purpose of this research is to overcome these two viewpoints at the same time. For this purpose, I pay my attention to the philosophy of Maurice Merleau-Ponty. A characteristic of his philosophy is to be going to get over intellectualism and empiricism from the standpoint of his original perspectivism.

My research intends to achieve this purpose by paying its attention to his language theory and historical philosophy.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・倫理学

キーワード：超越論的哲学 パースペクティブ主義 言語 身体 構造 歴史

1. 研究開始当初の背景

戦後日本の哲学研究のあり方は、他の専門諸科学のあり方に連動するかのよう、専門分化する傾向にある。そしてこのことがまた、哲学の本来のあり方を看過することにもなり、現代は個別的、領域的なさまざまな哲学の跋扈を許している状況である。このような哲学的状況の反省と改善の試みという意図が、本研究の背景には存している。

私は、これまでの二十数年に及ぶ哲学研究において、一方では、超越論的哲学の代表者とも言えるカントやフッサールの研究に従事し、認識や倫理や価値の究極的基礎づけを目指す哲学の基本的特徴とその問題点を学術的に考究するとともに、他方では、現代のパースペクティブ主義者の一人とも言えるメルロ＝ポンティの両義性および可逆性の哲学の研究をもう一つの柱としてきた。これら両面の研究を踏まえながら、みずからの研究の一つの集大成として、広義の超越論的哲学と、世界を多元的に捉える広義のパースペクティブ主義とを対置させることによって、新たな真理論や価値論の可能性を開こうとするのが、本研究の動機である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、デカルト以来現代に至るまでの近現代哲学の基本動向を二つの潮流、すなわち、一方では、究極的な基礎づけを追究する基礎づけ主義ないし超越論的哲学と、他方では、それに対するアンチテーゼとしてのパースペクティブ主義ないし相対主義という二つの潮流のうちに見届け、そのうえでこれら二つの立場を批判的に克服することである。

デカルト以来カントを経てフッサール、さらにはカール・オットー・アーペルやハバーマスなどの理性主義的哲学のうちに

は、認識一般や経験一般のみならず、さらには倫理や価値に関しても、その究極的基礎づけを目指す広義の超越論的哲学の傾向が見受けられる。ところが他方では、超越論的哲学のそのような基礎づけ主義ないし理性主義を拒否して、認識や経験についての多様な観点を認め、さらには価値や文化の多元性や相対主義を主張して、パースペクティブ主義を標榜する一連の哲学者たちがいる。本研究においては、これら両者の立場のそれぞれの本質を明らかにしながら、両者の相異を比較検討し、それによって、近現代哲学の根底に流れている二つの基本的趨勢の帰趨を浮き彫りにすることを試みる。それとともに、超越論主義とパースペクティブ主義のそれぞれが胚胎している問題点ないし限界を際立たせることを通して、今後の哲学のあり方として探究するものである。

「超越論的」という言葉自体は既に中世哲学の中でもアリストテレスのカテゴリー論を越える概念として重要な意味を持っていたが、近現代哲学においては、その言葉が人間の立場から捉え直されることによって、新たな意味で超越論的哲学という名称が与えられるようになった。この名称は、狭義においては、カントやフッサールの哲学の呼称ではあるが、しかしながら、この両者に限らず、広義においては、唯一の原理から世界を説明ないし展開しようとする近現代の多くの哲学者たちにも妥当する哲学的態度である。

他方、パースペクティブ主義は、例えば、ライプニッツ、ニーチェ、メルロ＝ポンティなどの哲学に顕著に見受けられる哲学的姿勢である。ライプニッツは、単子論(モノドロジー)においてそれぞれのモノドはそれぞれなりの判明度に応じて同一の宇宙を表象し表現するという多元主義を展開し、また、ニーチェは、キリスト教道徳の絶対性・普遍性を批判しながら生を多様な見方から照らし出す遠近法主義を打ち出し、あるいは、メルロ＝ポンティは、人間は動物とは異なり、同一主題を様々な視点から展望する「象徴的」行動形態をとるものであり、このような人間の知覚のあり方を身体論に定位しながら現象学的に記述している。さらに言えば、科学史や科学哲学の分野でも、現代は、歴史的視点を取り入れながら、相対主義的な科学観が支配的になっている。その意味では、パースペクティブ主義は、20世紀から今世紀にかけての哲学の基本的趨勢だと言っても過言ではない。しかしながら本研究は、原理主義ないし独断主義に陥り、他者性を忘却しがちな超越論主義の一面性を暴くとともに、他方では、相対主義に墮して価値の多元主義に甘んじがちなパースペクティブ主義の弱点を批判しながら、それら双方を越える哲学を将来の哲学のあり方として探究するものである。

3. 研究の方法

デカルト、カント、ドイツ観念論、フッサールにおける理性主義ないし基礎づけ主義を概観しながら、特に、カントとフッサールの超越論的哲学における基礎づけ主義を念頭に置きながら、メルロ＝ポンティのパースペクティブ主義に焦点を絞って研究した。

フッサールにおいて、中期の『イデーン』における構成的現象学から後期の発生的現象学への移行の意味を探ることによって、フッサール自身の超越論的哲学のうちに、基礎づけ主義に定位しながらも、究極的基礎づけの不可能性と歴史の哲学への洞察を見届けることによって、彼の自己批判的側面の哲学的射程を測る。

このことを通して、パースペクティブ主義の立場の哲学として、ライプニッツのモノドロジー、ニーチェの生の哲学、メルロ＝ポンティの現象学などを踏まえながら、パースペクティブ主義が相対主義という一般的な批判をどのように回避しているかという問題を考察の通奏低音として保持しながら研究を進めた。

メルロ＝ポンティのパースペクティブ主義については、特に、言語論と歴史哲学の観点からその特徴を照射しようと努めた。

4. 研究成果

(1) 言語論の観点

超越論的哲学はアприオリな概念や形式に基づいて世界を一義的に基礎づけようとする。それに対して、そもそもアприオリな概念や形式を世界理解の原理に据える発想は、世界の流動性や他者問題や歴史性を度外視したものである。それに対して、言語、但し数学や論理学の人工言語ではなく、生活世界に根ざした日常言語、の在り方に着目することによって、超越論的哲学の一面性を批判した。日常言語の本質は、その歴史性に根ざした多義性に存するのであり、この多義性がまた詩的言語の可能性にもつながっている。世界の真の在り方はこのような日常言語の可能性と限界を探求することと表裏をなしている。メルロ＝ポンティの言語論に着目しながら真理や価値の問題に接近することによって、「不条理を土台にした真理」という真理観にたどり着き、ここにこそ超越論的哲学を乗り越えるべきパースペクティブ主義の本領を見出した。

(2) 言語の二面性

日常言語は、制度としてすでに存在する言語であるとともに、その言語は固定的・強制的・必然的な側面のみならず、さらには歴史的な産物として開かれた側面をもっており、この両側面の全体として言語体系が成立していることを、ソシユール言語学に対するメルロ＝ポンティの解釈を通して明らかにした。この点において、本研究は、言語哲学に一石を投じることになる。

(3) 言語と構造

言語の自己構築性ないし再構造化は、たんに詩人や哲学者などの個人の営みによってなされるものではなく、むしろ、個人を超えた言語の「構造」的側面に着目しなければならない所以を本研究は研究した。

言語の「構造」とは、いわゆる構造主義の構造概念のように共時的なものではなく、歴史的に流動する共時的なものであることを、本研究はメルロ＝ポンティの言語哲学を通して明らかにした。

そしてまた、非歴史的な超越論的哲学と、相対主義に陥りがちなパースペクティブ主義との双方を同時に克服する道がメルロ＝ポンティの「構造」概念のうちに存することを鋭く剔抉した。

本研究のこの成果は、従来の研究には見られない斬新な着眼である。

(4) 構造と歴史

最後に、本研究は、超越論的哲学とパースペクティブ主義の両者の問題点を乗り越えるものとして、<哲学の歴史化>という結論に至った。

メルロ＝ポンティによれば、ヘーゲル哲学においてはじめて「哲学が歴史になった」のであるが、近代哲学の完成であるとともに現代哲学への扉を開いたヘーゲル哲学の今日的意義は、哲学の諸問題を歴史的に考察する道を示唆したことに存する。ニーチ

エの『道徳の系譜学』やそれに影響されたフーコーの系譜学的哲学は、メルロ=ポンティの哲学が今後の課題としてわれわれに残した問題群と密接につながるものである。

本研究は、構造概念と歴史概念との関係を「再組織化」とか「再構造化」という鍵概念を用いながら解明した。

以上の研究成果は、今までの哲学においては等閑に付されてきたものであり、近現代哲学の今後のあるべき方向を照らし出すものであると確信している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 7件)

円谷裕二(単著)、意味と歴史 メルロ=ポンティの歴史哲学、九州大学大学院人文科学研究紀要『哲学年報』、査読無、第73輯、2014、pp.1-17

円谷裕二(単著)、言語・構造・歴史 メルロ=ポンティの中期の言語哲学、西日本哲学会編『西日本哲学年報』、査読無、第21号、2013、pp.111-135

円谷裕二(単著)、言語のダイナミズム

ウィトゲンシュタインからメルロ=ポンティへ、九州大学大学院人文科学研究紀要『哲学年報』、査読無、第72輯、2013、pp.1-28

円谷裕二(単著)、生と死の哲学 ハイデガーとメルロ=ポンティをめぐって、九州大学出版会『生と死の探求』所収、査読無、2013、pp.3-20、

円谷裕二(単著)、反省的判断力と合目的性の原理、有福孝岳・牧野英二編『カントを学ぶ人のために』所収、世界思想社、査読無、2012、pp.241-255

円谷裕二(単著)、メルロ=ポンティの言語論 『知覚の現象学』に即して、九州大学人文科学研究紀要『哲学年報』、査読無、第70輯、2011、pp.1-39

円谷裕二(単著)、空間の弁証法 生きることと科学の狭間、雑誌『ARTing 特集1:アートと場所、特集2:文字の宇宙』、第2号、花書院、査読無、2009、pp.92-103

[学会発表](計 3件)

円谷裕二(単独)、人文学にとって言語

とは何か、韓中日学術大会
--Contemporary Humanistic Issues in East Asia--、韓国国立昌原大学校、2012年

円谷裕二(単独)、身体・言葉・歴史 メルロ=ポンティの言語論、第63回西日本哲学会シンポジウム、別府大学、2012年

円谷裕二(単独)、言葉・知覚・思惟 メルロ=ポンティの言語論を手がかりに、名古屋哲学会講演会、南山大学、2011年

6. 研究組織

(1)研究代表者

円谷 裕二 (TSUBURAYA, Yuji)
九州大学・大学院人文科学研究紀要・教授
研究者番号: 60227460